

専攻医
の主張

専攻医1年目を振り返って

広島西医療センター 脳神経内科 伊藤 沙希

雪から雨へと変わり、雪や氷の解けだす頃となりました。

当院ではCOVID-19感染流行の波が一段落し病棟にも落ち着きが戻ってきましたが、感染防御には予断を許さない日常が続く日々です。

脳神経内科では、冬場は夏と同様に脳卒中が多い季節ではありますが、当院では脳血管疾患以外にも変性疾患をはじめとした神経難病が多いことが特徴です。

私は今年度より当院で専攻医として研修させていただいており、当院に研修に来る前は「神経難病は患者さんや家族の方との関わり方が難しい」、「治らない病気だからできないことがない」と言ったことをさまざまな方面から聞き不安もありながらの研修開始でした。実際に研修を初めてはや9ヵ月、難病診療の難しさの中に、さまざまな学びがありました。例えば筋萎縮性側索硬化症や進行したパーキンソン病/症候群の患者さんとの言語での意思の疎通は非常に困難ではありますが、わずかな目のまばたきやうなずきなどで訴えたいことを表出しており、経験とともに疎通がある程度可能になることを知りました。これについては長年対応していらっしゃる病棟スタッフに助けていただきながら試行錯誤をしています。また同様の疾患で人工呼吸器などを選択しなかった患者さんの心理面に対し、神経痛などできる範囲での薬物介入や、なるべく自宅で過ごしたいと言った患者さんや

ご家族のニーズに対しリハビリスタッフ、退院支援スタッフ、看護師の方々など多職種で情報を共有することの大切さも知りました。時に難病診療でのご家族の胃瘻造設の決定について伺う時などに、生命予後を可能な限り延長したい半面病氣と先の見えない闘いをしなければいけない不安の相反するお気持ちがくみ取られご説明に苦慮することも多いですが、患者さんとの付き合いが長くなる病院だからこそその患者さんやご家族さんとの接し方や、病院でよりよく過ごしていただくための診療を上級医の先生に学びながら少しでもできることがあればと思います。現在慢性期疾患を中心に研修させていただいており比較的意思決定などの時間に余裕がある状況ですが、今後急性期病院で働くこととなった際にも患者さんやご家族さんの希望や生活背景について思考を巡らすことを忘れずに診療に当たればと思います。

脳神経内科の専門分野はこの他にも非常に広く、当院ではスモンやstiff-person症候群、抗LGI-1抗体陽性辺縁系脳炎などまれな疾患を比較的多く診療しています。診断された先生の幅広い鑑別疾患や診療能力を目の前にしながら内科専攻医としての自身の日常診療についても力不足を実感し、ベテランの先生方の中で途方に暮れる日々ですが、一つ一つの症例を経験とし診療に当たっていこうと思います。

広島県開業医休業補償制度にご加入の皆様へ重要なお知らせ

本制度は相互扶助の理念に基づき、加重平均を用いて加入者（開業A会員）全員一律の保険料を適用していますが、近年、加入者の年齢層の上昇により保険料の値上がりが続いております。

ついては、加入者の皆様にはすでに個別にご案内しております通り、適正な保険料の維持のため、**令和5年（2023年）12月より、満期脱退年齢を現行の77歳から75歳へ引き下げる****ことといたしました。**※第14回常任理事会承認（令和3年8月10日開催）

これまで新規加入者の積極的募集や団体割引の拡大などにより保険料維持に尽力して参りましたが、いずれも抜本的解決とはならず、やむなくこの度の決定となりました。ご加入者の皆様には、何卒諸般の事情をご賢察いただき、ご理解を賜りますようお願い申し上げます。